

ディオニュシオス一世の評価をめぐる

問題を考えるための覚え書き

中 村 純

はじめに

社会的に容認された慣習を無視して、ただその実力の故に一人支配者として振る舞う者を僭主と呼ぶ。ディオニュシオス一世がシラクサの僭主となったのは前四〇五年のことであった。たまたまそれ以前の半世紀ほどの間、ギリシア世界に僭主政が絶えてなかったため、彼以後の僭主達を「後期僭主」と呼ぶ場合もある。貴族政から民主政への移行期に出現したいわゆる前期僭主政を、きたるべき民主政を担う平民層の登場を準備したものとする評価がすでに定まっているかに見えるとすれば、古典期からヘレニズム期への移行期に現れた「後期僭主政」をヘレニズム期の君主政の先駆と見る向きがあるとしても無理からぬことかもしれない^①。むしろ、おおまかに言ってギリシア世界のなかでのこととは言え、それぞれに歴史と伝統を異にするさまざまな地域に出現した僭主政を、ただその出現の時期だけを尺度として一括りにするなどという乱暴な議論は論外として、その成熟度とはかく、形の上ではディオクレスの法のもとに比較的進んだ民主政を実現するまでに至っていたとみられるシラクサに登場したディオニュシオス一世の事例を、ポリスの衰退の時代、あるいはヘレニズム的君主政の勃興の時代という背景のなかに置いて眺めてみることに、それなりの意味もあらうかと思われる。とは言え、筆者には今のところ、この問題について全般的に検討する用意も力量もない。ここではただ、いわゆるクセニア関係についてのハーマンの画期的な研究^②に触発さ

れて、この研究の教えるところをディオニュシオスの事例に重ね合わせてみるとどのような問題が浮かび上がってくるかを示すことのみを目的とする。

まずディオニュシオス一世の事績をごく手短かに整理した上で、議論の手順を定めることとしよう。

ディオニュシオスはその生涯をカルタゴとの戦いに費やした人であったと言っても過言ではあるまい。彼は前四〇六年にシラクサの全権將軍となった。アテネのシシリ―遠征失敗の後、アテネ側についていたために窮地に立たされたセゲスタの援軍要請を受けてシシリ―に入ったカルタゴ軍の破竹の進撃をなんとか食い止めんがためであった。全権將軍となる前の経歴には、さして見るべきものはない。記すべきことは、アテネのシシリ―遠征を失敗に終わらした英雄でありながら、国外追放の身となり、それでもなお傭兵を率いて、カルタゴと戦ったヘルモクラテスの軍中であつたことくらいであろう。全権將軍となつた後、護衛隊の設置を承認させて、ディオニュシオスは僭主となつた。騎士層の抵抗に対してはカルタゴと一時、講和を結んで、傭兵軍の力で反乱を抑える。その後、オルテュギア島を要塞化し、巨大な傭兵軍を養い、ナクソス、カタネ、レオンティノイなど、東部シシリ―をその支配下におさめた。前三八〇年代前半には南イタリアにも遠征し、勢力下におさめていく。さらに、モロシア王アルケタスとの友好関係を通じてアドリア海にも影響力を保つた。カルタゴに対しては、前三九八―九二年、前三八二―七四年、前三六七年から死に至るまでと都合三回にわたつて、シシリ―島西部のカルタゴ勢力圏への攻撃を試みたが、シシリ―島からカルタゴ勢力を駆逐するには至らなかつた。³⁾

さて、ディオニュシオス一世という人物をどう評価するかという段になると、この人物にまつわるさまざまエピソードを捌いていかねばならない。史料の系譜をたどる複雑な作業が必要であろう。⁴⁾ディオニュシオス一世の僭主政がヘレニズム期の君主政の先駆かどうかという点も大きな問題である。しかしここではこれらの問題をはるかに見据えながらも直接扱うことは避け、いわゆるポリスの衰退の問題、具体的にはアテネとの比較を念頭に置きながら考察を進めたいと思う。さしあたり、一、ディオニュシオスはいかにして僭主となつたか、二、ディオニュシオスの僭主政はいかなる性格のものであつたか、以上

二点について思いつくまゝを述べる。一については、アテネ民主政においてデマゴグと呼ばれる一群の政治家たちが出現したことの有した意味を一方で考えながら、ディオニュシオスの姿勢を検討する。二に関しては、ギリシア世界において傭兵の使用が飛躍的に増大した時期とされている前四世紀初頭に活躍した軍事指導者としてのディオニュシオス像に焦点をおいて考えてみたい。いずれにしても、これから述べることは限られた観点からの思案にすぎないことをあらかじめお断りしておく。

一 デイオニユシオスの登場

アリストテレスが『政治学』のなかで、ディオニュシオスをデマゴグから僭主になった者たちのなかに数えていることはしばしば指摘されている。⁽⁵⁾ただしこの記述に同類としてあげられた僭主たちの顔ぶれからみて、アリストテレスはここでデマゴグという言葉はかなり広い意味で用いていると考えねばなるまい。広く大衆の支持を得ていたという程度の意味合いであろう。しかしむろん、このことはただちにディオニュシオスがクレオンを一つの典型とするような狭い意味でのデマゴグであったとみることを否定するものでもない。ディオニュシオスとともに名前をあげられたペイストラトスやキュプセロスなどの場合とは違って、ディオニュシオス登場時のシラクサにはすでに一応民主政が成立していた。とりわけて有力な家の出というわけでもないディオニュシオスが僭主の座にまでたどりつくにあたっては、大衆の支持を得て全権將軍の地位を得たことが大きな一ステップとなったことは否定し得ないであろう。少なくとも、ディオニュシオスのような出自の人物に僭主への道を開いたのはシラクサの民主政であったということは認めておかねばなるまい。

ペリクレス以後のアテネに出現したいわゆるデマゴグたちはいずれも当時の新興富裕者層出身であり、名門の出ではなかった。しかし、彼らは名門の出ではないが故にさしたる人脈も持たないことを、逆に売りものとして、下層市民の支持を取り

付ける際に利用していたとみられる節がある。親族や友人など、フィリアに基づいて結ばれた集団に対する忠誠心の方が、ややもするとポリスに対する忠誠心を凌駕するかのとき疑念を招きがちな名門出身の政治家たちとの違いを鮮明に打ち出すことによって、大衆の支持を得ようとした点に、デマゴグの政治家としての新しさがあったことは、デマゴグについて基礎的な研究を残したコンナー⁽⁶⁾が大いに強調した点であった。

前五世紀のアテネのデマゴグたちは一般に、「帝国」と呼ばれるデロス同盟の経営に手腕を振るい、下層市民の経済的な利害関心に訴えて大衆の心を掴むという政治手法を常とした。彼らは概して軍事的能力に秀でていたわけではなかったが、政策面ではいずれもかなり強硬な主戦派であったことは周知の事実であろう。戦争による得失を考えると、上層市民より下層市民の方が好戦的であったとしてもさほど不思議ではない。戦費を負担するのは上層市民であり、失うものを持たない下層市民は手当を受け取り、場合によっては戦利品の分け前にあずかることをも期待できる。ペロポネソス戦争期のアテネでは特に、ペリクレスの籠城策のおかげで大土地所有者の打撃は大きかった。それに比べて、さまざまなかたちで海上支配からの利益の分配を受ける下層市民がデロス同盟の解体を掲げるスパルタにおいてそれと妥協し得なかったのは当然であろう。しかしこれらのことは、形勢有利ないしはせめて互角な時点での話であり、形勢不利となるに至ってもなお主戦論が支持されるとすれば、そこにはなにか別の理由もあると考える余地があるのではないか。

古代ギリシアにはクセニアと呼ばれる慣行が存在した。ハーマン⁽⁷⁾はこのクセニアを親族関係と相補的なもの、あるいは親族関係と友人関係との中間的なものとみなし、基本的にフィリアと同質のものにとらえた。ただしクセニアの絆によって結ばれるのは所属する社会を異にする人々あるいは家どうしであった。ポリス社会の有力者たちはギリシア世界とその周辺にクセニア関係という人脈のネットワークを張り巡らせており、その連帯意識は本人の所属するポリスの不特定多数の下層市民との希薄な結びつきよりも強い。下層市民の側からすれば、内政面においてのみならず、軍事・外交面においても有力者がその所有する人脈の故に敵と妥協して、下層市民の利害と相反する行動をとるのではないかという危惧の念が強く働いて不思議は

ない。

ペロポネソス戦争期に出現したアテネのデマゴグたちが一貫して強力な主戦派であったことの背後にこのような事情を想定してよいとすれば、彼らが伝統的な有力者とは違って人脈を持たないことを強調したのは、単に内政面のみに関わる問題ではなかったと言えよう。

一方、ディオニュシオスがシラクサの將軍たちを解任に追い込み、自分自身を含む新たな將軍団を選任させた民会演説の際には、フィリストスという後援者が明確なたちで姿を見せていた⁸⁾。シラクサ屈指の名家の出と言われるヘルモクラテスの信奉者であったことからみても、後のディオニュシオスの歩みから考えても、彼が、フィリアという絆で結ばれた集団への帰属意識を否定することを売りものにして民心をとらえたとは考えにくい。この民会において彼はただ、將軍たちがカルタゴと同じ、賄賂をとっていると非難し、有力者のなかからではなく、大衆の味方から將軍を選ぶべきだと主張しただけであった⁹⁾。この時ディオニュシオスが大衆の支持を得られたのは、軍事的な危機に際して、カルタゴに対する徹底抗戦を掲げたディオニュシオスの主張と、自分のポリス以外に依るべきところのないシラクサの大衆の不安とが、たまたま符節を合したにすぎなかったのではあるまいか。ディオニュシオスはカルタゴと決して妥協しないことは約束したかもしれないが、シラクサのデーモスのみを友とし、彼らの利害を代表し、彼らの意向を体现する政治家として、つまりアテネのデマゴグと同じタイプの政治家としてシラクサの民会に登場したわけではなかったと考えたい。

その後、ディオニュシオスは旧ヘルモクラテス派や当時ゲラおよびシラクサが抱えていた傭兵の支持を確保し、カルタゴと戦う態勢を調えるとともに、自分の手もとに権力を集中していった。そして少なくともシラクサの下層市民はディオニュシオスの僭主化に抵抗を示しはしなかった¹⁰⁾。

二 デイオニュシオスの僭主政の性格

かつてフィンレイは、デイオニュシオスの親族中心主義が彼の支配のライト・モティーフであると述べた。そして、彼の支配が非常にパーソナルなものだった点に、ヘレニズム世界につながる新しさを⁽¹¹⁾見ている。しかし、自分の親族や友人を中心として支配層を構成することだけならば、そのことは、ペイストラトスの例を持ち出すまでもなく、いわゆる前期僭主の特徴でもあった。デイオニュシオスの親族・友人に頼った支配のあり方が新しく見えるのは、デイオニュシオスの支配下において、シラクサをはじめとするシシリーの諸ポリス各々の政治的一体性が事実上崩壊してしまったかのようにみえるからであるまいか。フィンレイが指摘しているとおり、デイオニュシオスはどこの僭主なのかと問われても、結局のところ彼の支配の及んだ限りの地域の⁽¹²⁾としか言いようがない。その彼の支配領域において支配層を形成したのが彼の親族や友人たちだった点にヘレニズム的君主政との類似を見ることは誤りではないかもしれない。

デイオニュシオスの親族・友人を核とする支配のあり方は、彼の権力基盤が傭兵軍にあったこと、そして彼がいわゆる前期僭主とは違って、傭兵軍を軍事遠征に使ったこととも無関係ではないように思われる。彼の傭兵の出身地は、シシリーはもとより、ギリシア本土、特にペロポネソス、さらにはカンパニア、リグリア、イベリアにまでおよんでいる。彼はいったいどのようなにしてさまざまな地域からあれほどの傭兵を集めることができたのであろうか。デイオニュシオスとほぼ同時代に一人のギリシア人重装歩兵を集めたペルシアの王子キュロスの傭兵の集め方を手がかりにして推理してみよう。

ハーマンの見解によれば、キュロスの傭兵軍は、クセニア関係を通じて集められた。キュロスの軍隊の将校たちは従前からキュロスのクセノスつまり友人であり、かれらはキュロスからの要請を受けて、それぞれ手勢をまとめてキュロスのもとにやって来た。この軍隊は集合後も合併、再組織されることなく、将校たちは自分の手勢を保持したまま、各自が直接にキュロ

スとのみつながりをもっていた。将校たちのほとんどがキュロスが軍隊を召集した目的が反乱にあることを知らなかったが、ペルシア帝国を手にいれれば、これを分け与えるべき友人の数が足りないことの方が心配なくらいだというキュロスの言葉に動かされて彼と行動をとるにする。将校たちはクセニア関係に包含される相互扶助の義務に従ったばかりでなく、実際に利益を得る見込みが大きいという判断もあって最終的にキュロスと行動をとるに決断を下している。誰かが手元の軍隊だけでは足りないような大遠征軍を組織しようとする場合には、このようなやり方をとるのがギリシア世界の伝統であり、ギリシア史を通じてこのような軍隊の召集の仕方はしばしば見られるものであることをハーマンは指摘している⁽¹⁸⁾

ディオニュシオスが時折将校団と会議を持っていること、ディオニュシオスの軍隊はそれぞれ出身地の武器で武装していたと想定されていることなどを勘案するとディオニュシオスの傭兵軍がキュロスの軍隊と同様のものであったと想定することも可能であるように思われる。オルテュギア島に居住することを許されたのが親族、友人と傭兵であったことにも注目したい。クセノスを迎えた者は自分の家をクセノスのために開放するのがしきたりとされていたからである⁽¹⁹⁾。

今仮にディオニュシオスもまたキュロスと同じやり方で彼の軍隊を集めたと想定すると、父祖伝来のクセニア関係の束を相続したとは思えないディオニュシオスが巨大な傭兵軍を召集するのは決してやさしいことではなかったであろう。いかに複雑な婚姻関係を結んでも⁽¹⁶⁾、それだけで手に入れられる人脈は量的に限られている。婚姻関係によって得られた人脈を核としつつ、紹介によって、あるいは善行を施すことによって、人脈の拡大をはからねばならない。僭主の権力をもって財を集め、ばらまくことは不可欠の手段であったはずである⁽¹⁷⁾。しかし、いかに財をかき集めようとも、傭兵軍をただ遊ばせておいたのでは財政がたちいくまい。支配領域を拡大し、これを分け与えることができなければ、巨大な傭兵軍の維持は困難であったと推測される。逆に軍事遠征による領域の拡大とその配分をする意志と能力があると認められれば、黙っていても傭兵が集まってくる可能性があったのではないか。カルタゴの脅威はディオニュシオスに格好の大義名分を与えたとみることができよう。

ディオニュシオスの僭主政は、彼の死に至るまで三十七年間続いた。一代に限ってみれば最長記録である。彼の支配を正当

化し得るものがいささかでもあるとすれば、それはカルタゴの脅威からシシリーを、あるいは少なくともシラクサを防衛し得たという点であろう。なるほどディオニュシオスは、ローマのようにカルタゴを葬り去ってしまうことはおろか、シシリー島からカルタゴ勢力を駆逐することすら達成できなかった。しかし公平にみて、ディオニュシオスはその僭主政のもとで、カルタゴと対抗し得る一大勢力圏をシラクサを拠点として作り上げたことは認めねばなるまい。純粹に軍事的観点のみから考えるならば、デイヴィスがすでに指摘しているとおり、彼の行為の多くは対カルタゴ戦の遂行という目的に照らして、有効な処置であったと考えることができる。シシリー島内のギリシア人同胞諸ポリスを攻撃して支配下に収めたことは、カルタゴがそれらのポリスをシラクサ攻撃の足がかりに使えないようにするためと言えぬこともない。諸ポリスの征服にともなったかなり荒っぽい人口移動も、対カルタゴ戦に備えて海軍力を維持するのに不可欠な軍船の漕ぎ手の確保のため、あるいは城砦、城壁建設に必要な労働力確保のためと考えることもできる。メッシーナ海峡を制圧することの軍事的意味は言うまでもない。イタリア遠征にしても、海軍力維持のために必要な資源の確保という意味合いも推察可能である⁽¹⁸⁾。

ディオニュシオスはカルタゴと生涯戦い続けた。そのために彼は巨大な軍事力を必要とした。そして彼がカルタゴと戦う過程で得たものは主として彼の親族と友人との間で分配された。ハーマンが描いてみせたように、クセニアのネットワークを広げることと財やサーヴィスを調達する能力の増大とが不可分の関係にあったとすれば、ディオニュシオスの親族、友人を核とした支配体制と彼の軍事的成功との間には密接な関係があったと言えるであろう。

おわりに

ハーマンは従来 *guest-friendship* と解釈されていたクセニアを *ritualised-friendship* と定義しなおし、このクセニア関係を、ポリス成立以前から広く古代世界に発達し、複雑に絡み合っていた人的結合のネットワークと考えた。ポリス成立後も、

ポリスの枠組みはこのネットワークの上にいわば重ね合わされただけで、このネットワークを解体しはしなかった。ポリスの時代にもクセニア関係の網の目はポリス世界の古層にあって根強く存在し、ポリスの境界を越えて広がっていたというのがハーマンの主張である。⁽¹⁹⁾

ハーマンの研究を、彼自身がほとんど取り上げていないディオニュシオスの事例にあえて適用することを試みたのは、それによって、カルタゴの脅威の存在とディオニュシオスの親族、友人を核としたパーソナルな支配体制との間の具体的な連関をうまく説き明かすことができるように思われたからである。ディオニュシオスの成功によって、クセニア関係のネットワークを十分に活用することが前四世紀以降の軍事的環境の中で勝利をおさめるためにかなり有効であるということがいち早く示されたという意味では、ディオニュシオスの僭主政はヘレニズム期の君主政の先駆をなしたと言ってもよいかもしれない。

ところで、ポリスにあってクセニア関係を保有し得るのは本来上層市民のみである。下層市民はポリスへの忠誠心をまず第一位に置くように求める。ポリス内部の市民間の連帯よりほかに頼るべきものがない下層市民の側からみれば、従来クセニア関係の中で財とサーヴィスの交換にすぎなかったことが時として賄賂と認識され、クセノス同士の高貴な義務であった協力が場合によってはポリスに対する裏切り行為と認定されることとなる。⁽²⁰⁾ こうした市民意識が強ければ強いほどディオニュシオスのような人物が活躍することは困難になるであろう。このことは、アテネのようにポリスとしての完成度が高くデーモスによる政治指導者のコントロールが行き届いていけばいるほど、⁽²¹⁾ デイオニュシオスが示したような形で、前四世紀以降の軍事的環境の中で生き残っていくことが難しくなるということを意味してはいまいか。シラクサのデーモスは、ペタリスモスの制度を持っていながら、ディオニュシオスの僭主化を阻止することができなかった。カルタゴの脅威はそれだけ切実なものであったと同時に、やはりシシリーにはポリス市民の市民意識が十分には根づいていなかったのもあるろう。ディオニュシオスに対する否定的な評価の大半がその発信地をアテネにおいているという事実には、ポリスの衰退という問題を考える上でも意味深いものがあるように思われる。

注

- (1) cf. 松藤和夫、「前四世紀における僭主政の歴史的意義」『史学雑誌』九四—一〇、四九—五〇頁。
- (2) cf. G. Herman, *Ritualised Friendship and the Greek City*, Cambridge U. P., 1987.
- (3) Diod. 13. 91. 3-15. 73.
- (4) cf. L. J. Sanders, *Dionysius I of Syracuse and Greek Tyranny*, New York 1987.
- (5) Arist., *Politica* 1310b. cf. 松藤「前掲論文」五二頁
- (6) W. R. Connor, *The New Politician of Fifth-Century Athens*, Princeton U. P., 1971.
- (7) Herman, *op. cit.*, pp. 16-34.
- (8) Diod. 13. 91. 4.
- (9) *ibid.* 13. 91. 4-5.
- (10) *ibid.* 13. 92. 1ff.
- (11) M. I. Finley, *Ancient Sicily*, London 1979, p. 77f.
- (12) *ibid.* p. 80.
- (13) Herman, *op. cit.*, pp. 97-105.
- (14) Diod. 14. 41. 4-6.
- (15) Herman, *op. cit.*, p. 28.
- (16) Finley, *op. cit.*, pp. 77ff.
- (17) cf. Herman, *op. cit.*, passim.
- (18) J. K. Davies, *Democracy and Classical Greece*, Sussex 1979, p. 206.
- (19) Herman, *op. cit.*, pp. 1-9.
- (20) cf. *ibid.* 116-161.
- (21) cf. J. Ober, *Mass and Elite in Democratic Athens*, Princeton U. P. 1989.